武州みたま

第五十八号

「神輿を担ぐ男たち」

男たちの掛け声が響き渡る日の出祭の朝。山頂にある神社に到着したときの彼らの清々しい表情を写真に収めながら、いつも達成感を共に味わっています。青空と新緑の下で人々が行列する光景を再び撮影できることを切に願います。

（写真・文　鶴巻育子）

御嶽神社あれこれ

御嶽神社の大鎧と五月人形の鎧

日本人形玩具学会会員　齋藤　愼一

現在、私たちが五月節句に飾る鎧は、鎌倉時代の「大鎧」と呼ばれる様式の甲冑です。日本の甲冑が最も美しかった時代のもので、源義経や畠山重忠の勇姿をイメージさせる甲冑です。

鎌倉時代の四方に足のついた唐櫃という箱の上に掛台を置き、大鎧の胴（左右の大袖・鳩尾・梅檀板・大袖左右の下に「籠手」をとりつけ、脇楯もつけた）を掛けます。「佩楯」をつけ、足許に「脛当」「毛沓」を揃えます。「籠手」以下は「小具足」といいます。兜と面頬をつけると、まるで人間が肘を張って威張っている姿です。しかしこれは、江戸時代以来の置き方、飾り方です。

中世は、大袖・梅檀板・鳩尾板のついた大鎧の胴に脇楯を添えて、兜をその上に掛け台なしで平たく置くのです。

こういう置き方は、平安末期の中尊寺旧蔵、大般若経一八二巻の見返しの仏画、鎌倉時代の絵巻物「粉河寺縁起絵巻」「平治物語絵巻（六波羅行幸巻）」、実景を写した記録「蒙古襲来絵詞（一二九三年成立）」武蔵武士風俗「男衾三郎絵詞」に描かれています。この時代の大鎧は、胴が内側にたたみこまれるので、前の方は「弦走韋」で多少せかれるので立ち上がるのですが、全体が提灯みたいに内側にたたみ込まれて平たくなります。そこに脇楯をよせかけて兜を上に置くという姿で描かれて、人間が座っているように飾らなかった。むろん掛け台もない。掛けっぱなしなどにすると、威糸や威韋が延びてしまいます。「籠手」以下は別にまとめて身に付けるのです。その後まず、脇楯を腰に結び、肩上をつかんで胴を着せかけ、胸板の左右の高紐の鞐をかけあわせ、左右の引合わせの緒を後ろのわなにかけて引戻し、左脇からの繰締緒と前で結び合わせて着用終了です。あとは、太刀の緒を結び、箙の緒も結び、そして兜をかぶるのです。

中世の武士たちは、絶えず「夜討、強盗」昼夜を問わない所領の侵犯にさらされ、それを実力で防ぐ職能人です。大鎧をごたごた飾り付けるなどしていられぬのです。すぐに着用できることが大切だった不穏な時代だったのです。皆さん、古文で習った「馬盗人（今昔物語）」に活写された源氏の武士父子の胸のすくような機敏な行動力、そして守護の警察権「大犯三箇条」（「貞永式目」）を思い出して下さい。

この時代の大鎧は構造的に未発達で小札の板を「側」として、威糸で連ねているだけの構造でした。それを側の縦へのゆるぎ（あがき）を裏面から「あがき止め」の韋で各段数カ所でかたく結び止めて、側を緊縛し運動しやすい構造にしたのが中世後期の胴丸・腹巻（疾走用の甲冑）です。そして当世具足は胴が数枚の立矧胴になるまで進歩する。さらに進歩して肩上が鉄板になって、負荷を背で受けて腰で受け止めることができたのです。この完成した例が、前回の五十七号の宝物シリーズ31「金小札段威二枚胴具足」なのです。「立胴」という構造の甲冑で、肩が楽になって運動機能抜群になったのです。

皆さん、皆さんのお宅の五月人形の「大鎧」は、多分掛け台に掛けなくてもよい、多分あがきを止めた立胴のはずです。要するに、見かけは鎌倉時代の姿なのに、近世に完成した当世具足の構造なのです。そして中世にはしなかった「小具足」一式を取り付けて、飾ります。

これは江戸時代に、天下泰平、二百五十年間内にも外にも戦争をしなかった、実に理想的な平和時代に、武技を実践できなかった武士が、その権威を誇示する飾り方だったんです。

御嶽神社に二度目の上覧の享保十六年五月八日文書（金井家文書・巻二・四一六）で、二領の鎧に「籠手」「腰当」など一式があるかどうか調べよ」と寺社奉行が下命しています。中世の鎧を数領みている古鎧の研究家であった吉宗でさえ、また役人たちも中世の鎧が、小具足は鎧本体とは一緒にしていないという習慣を知らなかったからです。当世具足がいつも小具足と一緒であることに見慣れていたからでしょう。

御嶽の神主さんたちは、翌日すぐに返答書（金井家文書・巻の二・四二七）で古来よりございません、と返答しています。一年に一度の神事に神主さんたちは大鎧と共に当世具足も取り出しているわけですから、当世具足は一式揃っているのに、何故大鎧にはないのかと思っていたことと思いますが「古来より無之」という返事は、結論として正しいのです。

皆さん、お節句の大鎧が江戸式だというのでがっかりしてはいけません。鎌倉武士から戦国時代まで、戦争態勢で生きてきた時代、そして天下惣無事令で鎮静、江戸時代に本格的な天下泰平二百五十年、あわせて八百五十年の武士の歴史事情を、甲冑の構造・構成の変化を、五月人形の「大鎧」に確認できるのです。

御嶽では、平安晩期から江戸時代まで様々な甲冑武具の構造・構成の変化を宝物殿で観察できます。じっと見つめて、それぞれが持つ時代性まで勉強していただけたらと思います。

第四十九回 武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

応募総数 三百三十六句

選者 蕃目良雨

特選

底冷えの百畳固き御師の宿　八王子市　髙井美智子
蟻地獄あり宿坊の長屋門　狭山市　古谷彰宏
金亀虫重忠像に体当り　日の出町　渡邊敏雄
御師の吹く笛にストーブ燃え盛る　渋谷区　山岸美代子
行衣干す雫下萌はじまれる　狭山市　古谷多賀子

秀逸

宿坊の障子洩れくる笛の音　墨田区　坂下千枝子
郭公や昼を灯ともす御師が家　青梅市　津布久信雄
新年の願ひは絵馬に筆太に　新座市　長谷川栄
権禰宜の印ふるはせて瀧しぶき　日の出町　渡邊敏雄
冬桜板碑ひしめく御嶽みち　世田谷区　堀井より子
鳶の輪の眼下に見えて冬もみぢ　新宿区　田中里香
すくと立つ神代欅冬日浴ぶ　八王子市　萩原まさこ
夕星や神代欅冬ともし　八王子市　網倉階子
山桜御岳に沈む夕日かな　大田区　前田裕太
報賽の初穂捧げて御師の宿　宮城県刈田郡　我妻遼

佳作

網戸ごしひぐらしを聞く夕餉かな　高津区　斉藤紀子
紅葉かつ散る愛犬とケーブルカー　川口市　井上裕太
虫の音を聴き入り上る御岳道　世田谷区　馬場晋一
たきちかくエアコンいらずすずしいな　東大和市　石井愛乃
妣を想いて登る夏御嶽　豊島区　髙野千尋
蕎麦で飲む山の気涼し本直し　練馬区　川村能正
山どりの尾を思わせる長い夜　中野区　加藤崇之
秋晴れの武蔵望みて御嶽山　練馬区　下橋美織
奥宮へ秋海棠に招かれり　大田区　佐藤啓三
狼の遠吠え想う初旭　青梅市　久保田亨

選者吟　萬緑のかなめ神代欅立つ

奉納俳句選評

底冷えの百畳固き御師の宿　髙井美智子

山地の狭隘な土地に建てられている御師の宿なので百畳敷は一間百畳でなく合わせて百畳で十分だろう。そのどれもが底冷えしていて固く感じられる。冬期の厳しい生活がこの一語に籠められる。連綿と続く信仰と修行のお山の実態を活写している。

蟻地獄あり宿坊の長屋門　古谷彰宏

蟻地獄とはなんと大仰な名前だろう。正体は薄羽蜉蝣（うすばかげろう）の幼虫の食卓である。すり鉢状になっていて一旦乗ると抜け出すことが出来ず捕食されてしまう。宿坊の中に入れば信仰と修行で身を守れるが、門の外の俗界は地獄が待っているぞと暗示しているようだ。

金亀虫重忠像に体当り　渡邊敏雄

板東武者の誉れの高い畠山重忠は鎌倉幕府誕生に貢献したが、初めは反頼朝で途中から親頼朝となったため、疑いの目をかけられ最後は幕府に討たれた。清廉潔白な人格を慕い後世の人は重忠を慕った。金亀子（こがねむし）と重忠の戦ごっこが微笑ましく平和の時代に相応しい。

御師の吹く笛にストーブ燃え盛る　山岸美代子

神社に参詣する人々をお世話する御師は、神社専属のコンシェルジュとも言える。山伏姿で法螺貝を吹く姿で知られるが、神楽にも関わるので、笛も得意だ。力強い笛に合わせストーブも燃え盛る、現代の御師の宿の一面を写生した。

行衣干す雫下萌はじまれる　古谷多賀子

行を終えて洗われた行衣から雫がしたたり落ちている。地面を見ると濡れた一帯は下萌が始まっている。春になると多くの参詣者が集まり、お山は賑わいを増すことであろう。春先の静かな御師の宿の一こま。

第五十回 奉納俳句募集要項

一、作品は未発表に限る
一、受付は指定用紙にて投句箱へとする
（郵送等直接の受付は致しません）
一、締切り　令和五年一月十五日
一、発表　令和五年三月中旬

四季を通じ「御岳山を題材」とした俳句を募集しております。
大勢の方の投句をお待ちしております。

御嶽蔵王権現 黒漆塗金細工御朱印帳

令和五年・大口真神式年祭を記念した授与品として頒布をはじめた特別な御朱印帳。製作は、先の酉年式年大祭時の社殿修復事業がご縁となり御岳山に工房をかまえました御師ならぬ塗師。「塗師屋 秋道」の秋道恵一さんにお話を伺いました。

こんな御朱印帳ないで！

—製作のきっかけは？

ある御師さんから「作れませんか」言われたことなんやけど。作れるで！言うて。東京藝術大学出身の小山真徳さんにデザインしてもろて。

塗って研いで塗って研いで、三回塗ったんよ。片面は白木のままやさかい、反らんようにとか神経遣ったわ。

—乾かし方に特徴があると聞きました。

漆はな、湿度がないと乾かへんねん。「ムロ」いうところに入れて、湿度を保ちながら二十四時間。最後の漆は刷毛目とかがあんまり目立ってしまうさかいにもっと時間かけて、びやーんって伸びるように馴染まさなならんで。

—時間かかりますね！　製作期間は？

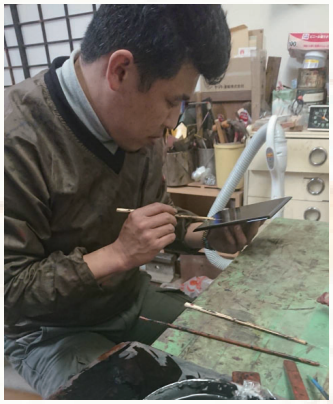
乾かすだけでも一日やろ。出張先でも夜な夜な研いだりしながら…合計で一年半くらいやな。

秋道 恵一（あきみち けいいち）

滋賀県彦根市出身。

伝統工芸士。文化財保存修復学会会員。

仏壇をはじめ、全国の社寺建築や修復に携わる。平成二十九年より当山に工房をかまえ、関東圏を中心に文化財修復に携わる。



—道具について教えてください。

定盤（じょうばん）は塗り台。刷毛は人間の髪の毛な。女性の髪の毛。鉛筆と一緒、板の中に端から端まで入っとる。使いやすいように刷毛を加工したりもするし、フシを取る針も柄つけたりして自作しとる。

—建物など大きい物を塗る時とは違う？

違う違う。違うし、手に取るもんっていうのはめっちゃ気ぃ遣うのよ、やっぱり。フシも全部取って。

手に持って見やるわけやんか。だからすごい、やっぱり綺麗に仕上げなあかんなって。

※フシ…表面に付着した細かいごみ

—金細工について教えてください。

「沈金（ちんきん）」やで、彫っとるんや。

その上に漆塗って、金粉を撒いて。ほいで、ワタでわーっと撫でて馴染ませていくねん。これが難しい。塗る漆が多いと金粉が沈んでまって表に出えへんねん。せやから薄く、薄くひいて。大変やさかい、あんまり細かいと嫌がられんねん（笑）

—裏面の通し番号は大字（だいじ）ですね。

どうしようか迷ったわ。壱、弐、参あたりはわかるけど。**面白いやん！**まあ手にしはった人が読めるか？とも思ってんけど…調べたらわかるやろって（笑）

—お手入れについては何かありますか？

汚れたら日本てぬぐいで拭く。化学繊維は傷つく。黒の漆は、漆と鉄の化学反応で黒くなるんよ。せやから紫外線に弱いねん。顔料など何も入ってないさかいに、曇るように白くなる。

—手もとで育っていくんですね！

あと、手に持つやんか、手の脂ついてツルツルになる。そうやってまた味が出てきよる。

こんな御朱印帳ないで！

伝統工芸士の漆塗りと沈金の技が光る限定百冊の御朱印帳。

こちらに当山きっての筆の名人・馬場猛仲の手による、「武蔵御嶽神社」・「産安社」、祭日限定の「男具那社」・「大口真神社」、四社の御朱印をすべて授与日の日付にて記帳してお分かちいたします。（郵送での授与はいたしかねます。）

○ 初穂料…一冊　三万円（桐箱入／通し番号はお選びいただけません）

「御岳山の紙垂（しで）」

お社の鳥居等はもちろん、ご家庭でも神棚にお飾りされる注連縄（しめなわ）。紙垂（しで）と呼ばれる半紙を裁断したものをつけて、お飾りするのが一般的です。

日本の先祖たちは古くから、山嶺や大きな岩などといった「自然の中」に神々を見出し信仰してきました。注連縄には、それら神々のいらっしゃる場所やモノを俗世と切り離し、悪霊の侵入を防ぐ結界のような役割をしたり、そこが神聖な場所である標示をする、という意義があります。

神社では鳥居をはじめ各お社の正面に飾られ、そこが信仰の対象であることを示しています。

紙垂は張られた注連縄に四つ若しくは八つ、注連縄に挟み込んで飾られます。その形からも想像できるように、稲妻を模して作られているといわれています。稲妻とは「稲の妻」。稲は雷の光を浴びてお米を実らせる、雷が落ちると豊作になるといった信仰が生まれ、また雷は「神鳴り」ともいわれ、邪気や悪霊を祓う意味もありました。紙垂もそのような人々の願いや信仰を具現化し、神様のいる特別な場所を表すものです。

基本的な形はどの神社でも同様ですが、御岳山に古くから伝わる紙垂は他の神社には見られない形で裁断されています。皆様も是非、実際にご覧になってどこが違うのか見つけてみてはいかがでしょうか。

（文　権禰宜　馬場慶太郎）

徒然ばなし

『何足の草鞋?!』（消防団篇）

権禰宜　久保田　享

私が、この山に奉仕して早二十年が立ちました。神社に奉仕し、家ではお客様をおもてなし、観光ではイベントにに参加し、消防団員でもあります。その中で今回は消防団活動について少しだけ、お話ししたいと思います。

基本の消防団活動は住民の生命と財産を守る事が活動となります。火災や、天災など活動は多岐に渡ります。その中でも御岳山だけ（?）と思える活動内容があります。それは山岳救助です。東京都の一大観光地で年間５０万人近くがこの山を訪れますが、その中には軽度の怪我から命に係わる重傷も数多くあるのです。下山途中疲れもあるのか、事故の多くは十五時以降に起こります。登頂した事に満足すると、つい注意を怠って滑落や捻挫等をする場合があるのです。

傷病者が警察や消防に連絡すると、一早く私たちに連絡が来ます。署隊が到着するまでに三十分以上かかるため地元消防団の出番という訳です。自宅から活動服に着替え、先ず詰所に集合。情報収集や装備を揃え、現場に飛んでいきます。そしてすぐさま容態観察と応急手当をし、その間も無線連絡で消防署と連携し、歩行の可否を確認して担架搬送をします。急傾斜地も場合もあるので担架搬送は筆舌に尽くしがたいです。

団車両から救急車に引き渡した時、御家族から「本当にありがとうございました。おかげで無事に家に帰る事が出来ました。」と笑顔で話される時には、これから帰ってお泊りのお客様の準備をしなくてはならないという事も忘れられる瞬間です。

活動をしていると、人名救助の大切さや、自分の置かれた環境がいかに特殊かを痛感させられます。登山においてはどんな低山でも十二分な準備はとても大切です。御岳山にいらっしゃる時には、準備を整えて、楽しい思い出を作ってもらいたいと思います。

（次回へつづく・・・）

NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』放映記念

企画展

鎧と刀剣展

御嶽に奉納した「もののふたちの魂」

NHK大河ドラマ
HPはこちらから

【鎌倉殿の13人】

当社には、都下にある国宝五点のうち二点が収蔵されています。その一つ、国宝「赤糸威鎧」は、今話題の大河ドラマ『鎌倉殿の13人』に登場する武将 畠山重忠が奉納した鎧として大切に伝わっています。貴族的で洗練された色彩と意匠を備え、古い形式を残す、完品で残る唯一の大鎧として貴重な逸品です。さらに「宝寿丸黒漆鞘太刀」（国指定重要文化財）も重忠奉納と伝わる大太刀で、倶利伽羅模様が施された迫力ある太刀に、黒漆を塗った鞘は、細見で薄くて軽く、ふっくらとして見事な帯取金物が残された品です。過日には、大河ドラマで畠山重忠役を熱演中の俳優・中川大志さんも訪問され、これらの貴重な収蔵品を熱心にご覧になりました。

畠山重忠は（一一六四～一二〇五）、源平時代から鎌倉時代初期にかけて活躍した武蔵の国の武将です。先祖は桓武平氏の流れを汲む埼玉県の秩父地方に大きな勢力を持っていた秩父氏といわれ、父・畠山重能の時代に武蔵国畠山荘（現在の埼玉県深谷市）へ移り住んだことを機にその姓を名乗ったと考えられています。重忠は、少年時代をこの畠山の地で過ごし、やがて菅谷に館を構えます。

『坂東武士の鑑』と称された重忠は、武勇・芸術・人柄に優れた魅力あふれる人物として長く人々から愛されていました。『平家物語』や『吾妻鏡』など鎌倉時代の軍記物には板東武者の中でも登場数が多く、数々の逸話が残されています。一ノ谷の合戦における鵯越では、愛馬の「三日月」が怪我をしてはかわいそうだ、として馬をを背負って坂を駆け下りる「逆落とし」の場面は特に有名です。続く室町時代には、能や舞の演目に登場し、江戸時代には歌舞伎や人形浄瑠璃など大衆芸能にも広く取り上げられました。

宝物殿では、重忠ゆかりの収蔵品のほか、鎌倉時代から江戸時代末にいたるまで、多くの武士たちが様々な願いや祈りを込めて奉納した数々の鎧や太刀を取り揃え、企画展 ―もののふたちの魂―『鎧と刀剣展』を開催しております。最高の素材と技術の粋を集めて作られた品々を、この機会に是非ご覧ください。

清廉の武将 畠山重忠像（作：北村西望）

おいぬ様で知られる『大口真神』は、奥宮「男具那社」のご祭神である「日本武尊」の御眷属であり、また火難盗難、諸災退除の守護神として祀られており、江戸時代から人々の篤い信仰を集めております。

当社では平成二十三年より、御神像をご本殿にお遷しして行われる、「大口真神式年祭」を十二年毎に斎行しておりますが、いよいよ来年に式年祭の年を迎えます。ご開扉によるおいぬ様拝観は、一日四回、その他式年祭を祝い様々なイベントを企画しております。詳細については秋号に掲載いたします。

イベント（予定）①全国のおいぬ様写真展　青柳健二（式年祭期間中）
②野点・琴演奏　四月二十二日・二十三日、五月十三日・十四日（計四回）
③「オオカミの護符」上映会＋小倉美恵子さん講演会
四月十五日（土）ビジターセンター（予定）
④お狗様展（絵画・造型物）夏・秋（予定）
⑤宝物殿にて「御嶽のお狗様展」鶴巻育子写真展「おいぬ様」（年間）
⑥わんちゃん大祭　戌の日
四月二十二日（土）・五月十六日（水）十時（要予約）
⑦奉納芸能（式年祭期間中）

御岳山に暮らすムササビ ムサくん

御岳ビジターセンター

ムサくんだより

「足元の小さな春」

「春が来た！」と実感するのはどんな時ですか？　春一番が吹いた時？野鳥が囀り始めた時？おいしい山菜が出てきた時？桜が咲き始めた時？

御岳山にいると、四季を通して植物や昆虫たちの移り変わり、動物たちが食べた旬の食べ物の痕跡や、空や雲の様子、気候の変化を日々感じます。寒い冬を越して、暖かい春を待ち望んでいたのは、ひとも動物も植物も昆虫もみな同じです。

その中でも私が特に春を感じるのは、足元の小さな植物たちが力強く芽を出し、咲き誇る時でしょうか。

今回は私の春のお花ベスト3をご紹介させていただきたいと思います。

まずは可愛いお名前のハナネコノメ。ハナネコノメはその姿もとても可愛らしく、湿った場所が好きで、ロックガーデン沿いの石段のふちなどで見つけることができます。

ハナネコノメ

5リミほどの小さな白い花びらのように見えるのは実は萼（がく）で、中央の赤い雄しべとともによく目につきます。小さいですが密集して生えているので探してみてください。

アズマイチゲは一本の茎に対して一つの花を咲かせます。それも、晴れた日にしか花を開きません。集落のよく陽が当たる斜面で出会える白い可憐なお花です。

アズマイチゲ

エイザンスミレ

そしてスミレ。御岳山では10種類以上のスミレに出会うことができます。道すがらたくさん出会えるものから限定された場所にしか生えないものまで個性豊かです。

こんな小さな花たちが寒い冬を越して、一生懸命咲き始めると、私も頑張ろう！と思います。他にもご紹介したい春のお花はたくさんあります！

是非ビジターセンターで聞いてみてくださいね。

令和五年

大口真神式年祭 御奉賛のお願い

諸災退除の守護神である大口真神の御神徳を輝かしめて、世界の平和と安寧、そして講中崇敬者皆様の家内安全・商売繁盛・厄難消除を祈念する「大口真神式年祭」を令和五年に控え、修理事業および境内整備等を順次進めております。

皆様の深いご理解とご信仰を賜り、心からの御奉賛を仰ぎたくお願い申し上げます。

御奉賛　一口　二千円～

敬神奉賛員募集のご案内

当社では、敬神奉賛員を募集しております。敬神奉賛員とは、御嶽大神の御神徳を敬い、皆様の心の拠りどころとして、また武蔵御嶽神社の更なる護持発展を目的に創設いたしました。

奉賛員には例祭、祭典・行事のご案内のほか、新年に向けての御神札など各種の特典が受けられます。趣旨にご賛同いただき、ご入会下さいますようご案内申し上げます。

賛助費　五〇〇〇円

※詳しくは、社務所までご連絡下さい。

神社の杜（五十八）

『夏越の大祓とジジババ』

片柳　茂生

茅の輪くぐりで知られる夏越の大祓。生活の中で知らず知らずに身についた罪や穢れ、災厄を祓う行事です。今回はこの大祓式の準備についてお話しましょう。

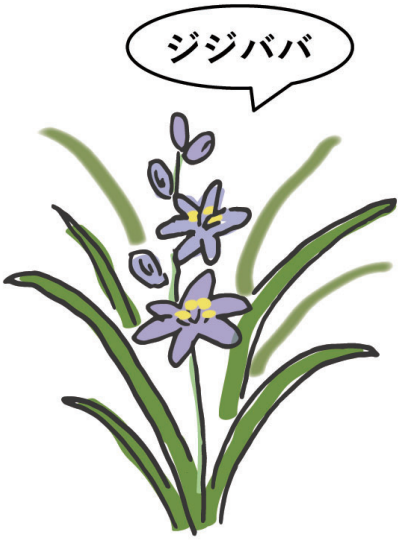
大祓いに必要なものにまず人形（ひとがた）、これは事前に作り、氏子の皆さんにお配りします。この他の物は行事が行われる六月三十日の前日に十名程の神主が分担して作らなければなりません。結構大変な仕事です。

準備は、早朝茅場（かやば）から一人が一抱え程の茅を刈り採ってくるところから始まります。神社に集められた茅は大量です。その茅を使ってまず茅の輪を作ります。直径六尺程のものを二つ。それと近年になって犬用の茅の輪も作るようになりました。選りすぐった茅で菰も作ります。この菰は、行事の最後には舟に仕立てられ、人形や威儀物を包み込むように乗せ、翌日神主によって七代の滝から流されます。その舟に乗せる威儀物も別の神主によって作ります。それは、①形代を叩く長さ一尺五寸程の桃の枝の棒、②形代を乗せて叩く台、これは八寸程に切った桃の枝をすだれ状に編んで作ります。③右と左に縒り分けた麻紐を各八本。④太さ二センチ程の桃の枝を細く裂き、八本一束にしたものを八束、⑤神社の裏山から採取してくる、ジジババと称する植物の新芽をやはり八束。③から⑤はそれぞれ長さを二寸位に揃えます。

ここで、え！ジジババがなんで！と思われた方もいるでしょう。そうです、これらの威儀物の中で、ジジババだけがこの行事に何故か相応（ふさわし）くないと思えるのです。

ジジババとは早春に咲く春蘭の別名ですが、桃や麻のように「祓」に特別な意味合いはありません。本来は「スゲ」であったと思われます。春蘭とスゲ、確かに葉の形は似ています。でも形だけです、生え方や色合い、葉の硬さなど明らかに違います。花が咲いている時ならば一目瞭然です。たぶん先人たちが何時のころからか呼び名を取り違えてしまったのでしょう。さらに面白いことに、裏山から採取してくる植物の新芽は春蘭やスゲとも全く違うものでした。実際に採りに行って初めて解ったのですが、ジジババとはヒメヤブランの事だったのです。ヒメヤブランは夏の終わりに高さ十センチ程に伸びた柄に淡い紫色の小さな花を数輪付ける目立ちませんが可愛い花です。

先人たちの勘違いだったのかもしれませんが、今でもそしてこれからも大祓いに必要な植物はあくまで「ジジババ」なのです。



あとがき

初晴れにはじまり明るい年になると思いきや、再度感染拡大したコロナウイルス。収束に向かっていることは間違いありませんが、もう少し辛抱することになりそうです。

世界では驚くべきことが起きています。中でも、一月のトンガ海底火山大規模噴火。思い出されるのは平成三年のフィリピン・ピナツボの大噴火。地球規模の気候変動が起こり、二年後には冷害による米の不作、いわゆる「平成の米騒動」が起こるに至りました。今回も同じように影響を及ぼす可能性があるとも言われています。

我が国がこの先も末永く、瑞々しい稲穂が豊かに実る国であることを願うばかりです。

最後に、この半年間を無事に過ごせたことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教授下さる先生方、ご奉納頂きました皆様、各種祭典や行事に御協力・御協賛下さいました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。また、齋藤愼一先生、鶴巻育子様、玉稿を有難うございました。

令和四年　三月二十五日発行
〔年二回発行・非売品〕
編集　武蔵御嶽神社
TEL　〇四二八（七八）八五〇〇
FAX　〇四二八（七八）九七四一
http://www.musashimitakejinja.jp/
印刷　㈱成和印刷

武蔵御嶽神社
公式ＳＮＳ
facebook
instagram